

現地レポート 05

沈下橋建設と暮らしの変化

ミャンマー連邦共和国 マグウェ地域 アウンラン地区

GGP 橋（橋長 76 m／幅員 4 m）

在ミャンマー日本国大使館の草の根事業(GGP)により建てられた沈下橋は、アウンランの町から東に車で約 45 分の場所に位置する。アウンラン町側のタンジエイ村とミョウラ村の境に GGP の橋(以後 GGP 橋)は架かっており、約 20000 人に裨益する。この辺では豆や米を主に栽培している。

資金的な問題により JIP で建設することができなかったが、助言によって日本大使館の 2018 年度・草の根事業として採用された。

GGP 橋が建設される経緯を説明したい。2018 年、はじめにアウンランへのインフラを改善したいミョウラ村の人たちが中心となり 19 村に働きかけ、村間の道路整備に取り組んだ。賛同した 19 村の住民も道にするために必要な畑の土地を提供した。自助努力により、土で固めた道路約 1.2 キロを建設している時にマグウェ政府がそのことを知り、政府が大部分の予算を出してくれたそうだ。そのように、村の発展に尽力する人たちが多く、1 年半で道の整備から GGP 橋の完成まで成し遂げた。利便性が向上し、この辺り一帯の経済活動が飛躍的に活発になっていった。

これまで雨季の間は、今の場所ではなく 600 メートルほど離れた場所から河川を渡っていたそうだ。牛車またはエンジンなしの小舟で渡っていた。小舟につけているロープを向こう岸の人が引っっぱっていたそうだ。舟

執筆・撮影者紹介

兵頭千夏さん

ヤンゴンを拠点に、ミャンマーの人々の生活・伝統文化・信仰・女性をメインテーマに撮影している写真家。2003 年よりヤンゴン文化大学に 2 年間留学し、ミャンマー語の通訳者、翻訳者としても幅広く活躍しています。

今回、JIP の沈下橋建設事業がミャンマーの人々の暮らしをどのように変えたのか、現地の撮影や住民へのインタビューを通して、レポートをしていただきました。



アウンラン町側から見た GGP 橋

に乗る場合、人は 500 チャット¹、バイクは 1,000 チャット支払わなければいけなかった。人力で渡っていたので 1-2 時間待つこともざらだったそう。アウンランの町で買物したいだけなのに、朝 4 時に牛車を借りて河川を渡し、市場に行っていた人もいる。水位が増せば数日間渡れなくなるため、へびに噛まれて、急患が出た場合、アウンランの病院に搬送したくても河川を渡れず、途中で亡くなる人もいたそうだ。河川に続く道も雨季は泥だらけになり、アウンランの町へ行くのは一苦労だったという。

GGP 橋が建設されることになり、道路整備の時に活動したメンバーが再び橋建設委員会のメンバーとなった。

工事は 4 ヶ月半。橋建設委員会のメンバーは、毎日、建築現場を見に行き、欠かさずレポートを大使館に送った。建築作業には大変満足しており、このような堅固な橋ができたのも JIP の助言があつてのこと、とても感謝していると橋建設委員会の U Ye Myint (67) 会長は何度も口にしました。予算がかからないそうなので、他の村にも同じように橋ができれば良いと思う。政府にはもっと建設して欲しいとも述べていた。

ちなみに現場で働くと 8 時間、5,000 チャットが支払われたそうだ。

道路が整備されたところに GGP 橋が完成し、アウンランまでのアクセスが大幅に改善された。ミョウラ村よりもさらに奥のシュエバンドーアシェという村からバスが朝 5-9 時の間に 7 台、アウンランに向けて橋を渡る。それら 7 台のバスは昼の 12 時から 4 時半の間にアウンランから戻ってくる。バス以外にも乗り合いトラックがシュエバンドーアシェとアウンラン間を往来していて、1 日に約 80 台が橋の恩恵を受けている。さらにシュエバンドーアシェからは 1 日 1 便だがヤンゴン行きのバスも出ている。これまでヤンゴンに行く場合、アウンランでバスを乗り継ぎ 1 泊しなければならず、2 日かかっていた。今では夕方に出発し翌朝ヤンゴンに着くようになった。



橋面



絶え間なくバイクが往来する



朝、出発したバスが大勢の乗客を乗せアウンランから戻ってきた



銘版

沈下橋完成後の昨年の雨季は、7日ほど雨量が多く水位が上がったが約3時間で水は引き、車、牛車、バイクで渡れるようになった。命の危険を考え、赤と白の地覆が見えない時は通行禁止にしているようだ。子どもたちには保護者と一緒に橋を渡るよう、バイクに乗る人は、地覆は見えるが橋面に水が達している場合中央を運転するよう伝えているとのこと。橋を利用する教師が約100人、ミョウラ村の高校にバイク通学をする生徒が約120人いるが、今のところ沈下橋での事故や落下したという話しは聞かれていないようだ。

タンジェイ村の中学で教える教師の Daw That Mon Aung と Daw Phy Phy Thin は毎日、GGP 橋を利用しバイクで通っている。橋のおかげで一年を通じて問題なく学校に行けるようになり、感謝していると述べた。

橋維持委員会の U Ye Wana (42) 会長にこれまでどのような活動をおこなってきたか尋ねたところ、牛車の鉄の車輪が橋面を痛めるので渡らせないようにしているようだ。牛車が橋を渡るのは雨季の7-9月の間だけで、それ以外は牛車道を利用させている。長期維持のため、今後、修繕費の必要性を考え、橋の両側の村人たちから寄付を募るつもりだと話していた。

橋建設委員会では会長を務めた U Ye Myint は、橋維持委員会では役職につかないが、変わらず村の発展に貢献したいと述べた。「この地域は雨季になるとずっと苦勞をしていたんだ。道路と沈下橋が完成するまでの1年半、交通の便を良くさせたい一心だった。道がコンクリートまたは舗装道路になれば、もっと便利になるから政府に申請したよ。予算の都合上、どうなるかわからないけどね。日本大使館とやり取りをし、GGP 橋が完成したことで自信がついたよ。自分たちの力で出来ることをやっていくよ」と語る67歳になる U Ye Myint さんの周りで村人が頷いていた



牛車道



スピードを落としてすれ違っていた

日本が支援した橋という看板
橋の両側に設置

バイク通学をする生徒

所感

沈下橋建設事業の妥当性は高く、現地ニーズに沿うものであった。日本国大使館の草の根事業となったが、JIP の掲げる上位目標は達成されていた。沈下橋の建築は効率よくおこなわれ、住民から技術的な面においても信頼を得ていた。幹線道路に繋がる橋であったことから、近隣住民の生活環境を飛躍的に向上させるもので、経済的・社会的インパクトが高かった。

もともと道路整備をおこなうなど近隣の村々との連携がなされており、コミュニティの結束力が高かった。さらに沈下橋建設を通し、一層良好な関係性が築かれていた。持続、自立発展のため、すでに橋維持委員会が作られていたが具体的な活動はこれからの様子。草の根事業はフォローアップもおこなうため、報告書を提出させている。はじめより、事業終了後は橋維持委員会を設立するよう指導していたのかもしれない。

橋建設委員会および橋維持委員会、両方に女性は参加していなかった。ジェンダーの配慮はなされていなかった。子どもたちは1人で渡らないよう言い聞かせている程度であり、安全指導がおこなわれているとは言いがたく、配慮が欠けていると感じた。

今般、調査した中で一番インフラを向上させ、地域住民の社会経済活動に貢献した事業と感じた。日本国大使館の草の根事業に申請するよう助言したことは、大変意義あることであったと思われる。

¹ ミャンマーの通貨単位。500 チャット≒35～40 円



橋の側面



毎日、沈下橋を利用する中学教師
Daw That Mon Aung (左)と
Daw Phy Phy Thin (右)



橋建設と橋維持委員会メンバー
橋建設委員会 U Ye Myint 会長
(右端)